

日本を救った 二本の絆

内山 正紀 東幼48

東京赤坂にある乃木神社の周辺が東京大空襲の際にも焼け残ったのは、連合国軍最高司令官のマッカーサーの指令によるという説があるが、その真偽は不明である。

マッカーサーの父親（陸軍少将）はアメリカの南北戦争にも従軍した軍人で、後には陸軍参謀次長にもなった。また日露戦争時には観戦従軍武官として第三軍司令官乃木希典將軍の傍らにあり、乃木將軍を最高の武人として敬服していたという。その時、父親に同行していた息子のダグラス・マッカーサーも父の心を継いでいたのである。乃木希典から受けた感銘を絆の一本としてしっかりと握りしめていた。

彼は日本占領中には乃木神社にMPを派遣して警備させ、米兵らの乱暴を防いでいた。そして解任されて日本を離れる際には、元帥自身が乃木邸を訪れて「はなみずき」を植樹し、別れの挨拶としたという。

もう一本の絆は海軍のニミッツが握っていた。

1905年（明治38年）の夏、アメ

リカの軍艦「オハイオ」は東京沖に停泊していた。この年、日露戦争は終わり、東京で凱旋記念園遊会が催された。

「オハイオ」にも招待状が届いたが関心を持つ人は少なく、招待状は士官候補生達の所まで来た。そして好奇心旺盛な士官候補生6人が代表として園遊会に出席することになった。その中に若き日のニミッツが含まれていた。

彼らは会場で東郷元帥の姿を見つけると声をかけ挨拶をした。気さくな元帥は若者達と30分ほど会話をした。英国に何年も留学した元帥の英語は、若者達が使うアメリカ訛りのある英語とは違い、イギリス風の風格あるキングス・イングリッシュであった。

これだけならば遠洋航海中の士官候補生の思い出の一頁で終ったであろう。だがそれから30年ほどを経て、運命の女神はニミッツを再び東郷元帥の傍らに導いたのであった。

1934年（昭和9年）6月4日、ニミッツは米国アジア艦隊の旗艦「オーガスタ」の艦長として横浜に入港した。その時は偶然にも東郷元帥の逝去と重なっていた。6月5日に行なわれた外国葬の日には、東京湾に停泊していた外国軍艦もすべて自国の国旗と日本の国旗を半旗に掲げて提督の名譽を讃え、弔砲を発射した。艦隊の旗艦艦長であるニミッツは一小隊の儀仗兵を率いて葬儀に参加し、翌日には艦隊

の司令長官や参謀長らとともに東郷家での葬儀にも出席した。

それから10年余の月日が流れた。その間にはかつて予想もされなかった程のげいしい戦争が地球上を覆っていた。1945年（昭和20年）8月、日本が連合国の呈示したポツダム宣言を受諾することによって全世界を巻き込んだ戦いは終結した。9月2日、東京湾に停泊したアメリカの戦艦「ミズーリ」号上でポツダム宣言受諾の調印式が行われた。戦艦ミズーリは沖繩戦で日本軍の猛烈な攻撃（特攻）を受け損傷していた。損害を隠すためにシートで覆い、その前には乗組員を並ばせて見えないようにした。調印式に日本代表として出席したのは重光葵外務大臣・梅津美治郎参謀総長であった。米側は連合国軍最高司令官の元帥ダグラス・マッカーサーが署名し、アメリカ政府を代表したのは太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥であった。その後の

に参拝し、横須賀の戦艦三笠も訪れた。空襲により破壊された東郷神社が再建を計画していることを知ると、ニミッツは東郷神社再建奉賛会に基金を寄付した。戦艦三笠は国家的記念物として固定され保存されていた。だが、占領軍水兵などが記念品として略奪したり破壊する者もあり、それを防ぐために海兵隊員を見張りとして派遣することにした。

終戦後の日本は、様々な紆余曲折もありながら多くの困難を乗り越えることができた。日本国が地図の上から消え去ることもなく、世界史の中に不死鳥の如くに再生復活することが出来たのはまさにニミッツとマッカーサー両元帥のおかげである。このことは歴史的事実として意識せねばならない。この2人のアメリカ軍人に何らかの精神的影響を与えたとも思われる乃木大将と東郷元帥の偉大さも改めて認識したい。

ニミッツが関わっていた事は日本にとつては奇跡的な、最高の幸運であった。彼等以上に日本を知り、日本を理解出来た人は他にはないであろう。明治時代の乃木希典將軍、東郷平八郎提督から何等かの感銘を受けた2人のアメリカ軍人が握っていた絆が日本を救ってくれたのだと思う。

終戦後、ニミッツは東京の東郷神社

